Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 海外報告(2)　ニューヨーク海外研修報告 |
| Author(s) | 豊原, 正智 |
| Citation | デザイン理論. 1986, 25, p. 105-108 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52640 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

（海外報告）

# ニューヨーク海外研修報告

豊　原　正　智

私は，昭和60年度「塚本英世記念国際交流計画」に基づく海外研修員（昭和61年１月６日～５月31日）として，ニューヨーク州立大学ビンガムトン校（State University of New York (SUNY) at Binghamton）を中心に約五ヶ月滞在し，「映像芸術とテクノロジー」というテーマで研究を行う機会を得た。又その間，三月末と五月初前後二回に渡り，10日間程マサチューセッツ工科大学（MIT）の高等視覚研究所（CAVS）を訪れ，その活動状況に触れ，資料を集めることができた。

１月６日，ニューヨークのJ. F. ケネディ国際空港に降り，空港カウンターで一泊60ドルのホテルを予約し，相乗りリムジンでまっすぐマンハッタンに向った。マンハッタンは比較的暖かいということであったが，街頭の電光温度計は23℉（－５℃）を示していた。一週間滞在し，その後州中南部のビンガムトンへ向った。ビンガムトンでは昼間－10℃前後で，少し暖かいなと思っても－５℃位にしかならない。ニューヨーク市ではそれ程寒いとは感じなかったが，ここではさすがに寒さを感じた。キャンパスの中を少し歩くと耳が痛くなり，しばらくすると頭痛がしてくる程であった。日本の函館とほぼ同じ緯度に位置するので，さもありなんと思ったが，第一印象は，やはり，これは大変なところに来たなという感じであった。しかし，寒さに極端に苦手な私も，二週間もしないうちに慣れてきて，むしろ30㎝程積ったまま消えないキャンパスの雪景色を楽しむ余裕すら生まれたものだ。

映画学科にはL. ゴットハイムとK. ジェイコブズという二人の実験映画作家とビデオ・アーティストのR. ホッキングが教授として指導に当っている。最

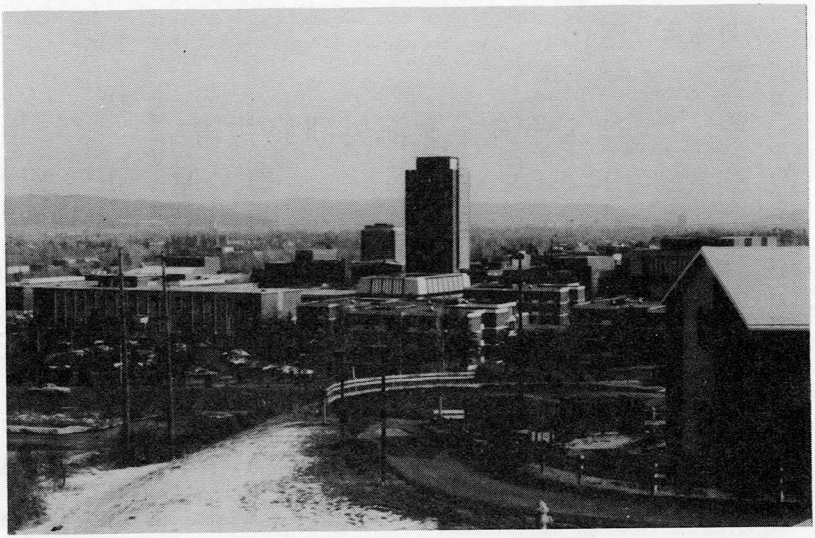

図1　ニューヨーク州立大学ビンガムトン校
院生のためのアパート（手前）からキャンパス中央部を望む

近大島渚の研究しているM.トゥリム助教授とは二年前京都で会ったが，今年は私とは入れ違いで一年間の予定でパリに研究で滞在しているということで会えなかった。代りにM.ウォルシュが非常勤で映画理論，映画分析の講座を担当していた。

私は，映画学科の客員研究員（Visiting Scholar）として，研究室（K.ジェイコブズによれば，「サブマリン」（窓がないから））及びビデオ・スタジオの鍵を提供され，自由に使えるよう配慮してもらった。

私はまめに彼らの授業に出た。一つはどのような制作及び理論の授業をやっているか興味があったのと，もう一つは毎回授業で映画，ビデオの作品が上映されるからであった。私の記録では14週間の後期の間で，学生の自主上映団体のものも含めて75本の映画と10本のビデオ作品を観たが，全体では恐らく100本は優に越えていると思う。一週間に7本以上上映していることになる。私も実際，10本観た週があった。

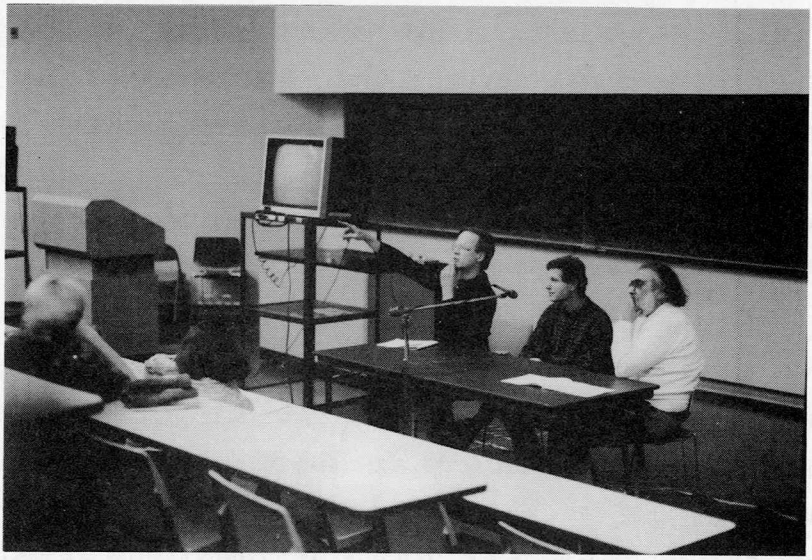

図２　SONY―フィルム/ビデオ・フェスティバル，作品上映後のディスカッション，左からトニー・コンラッド（バッファロー校），ラリー・ゴットハイム（ビンガムトン校），リチャード・ロジャーズ（パーチェス校）

L. ゴットハイムの16㎜映画制作のクラスでは，作品の上映の後それについてのディスカッション，あるいは進行中の学生のラッシュ・フィルムを上映して議論するという形式であった。その雰囲気は，教授，学生の双方がファースト・ネームで呼び合う性か実にフランクで，和気あいあいといった感じである。

K. ジェイコブズの授業は「映画とビデオにおける実験と革新」という２時間40分の授業で，ここでも作品の上映と彼の講義及び学生とのディスカッションが行われた。彼のキャラクターの性もあって，このクラスは実に活発で，こちらの英語力不足もあるが，議論の半分位しかついて行けず，議論が私の方に飛び火するのを恐れながら，久し振りに学生のような気持で緊張しながら座っていた。五時に授業が終ると，いつも頭がぼうっとしていて，異国語の中に居ることがこんなにしんどいものかとつくづく思い知らされた。

ビデオ・アートの授業では，専ら技術的なメカニズムの講義と制作が中心で，時々R.ホッキング自身及びその他作家の作品を参考に観せてくれる。私は学生の制作の邪魔にならないよう気を使いながら，専ら夜遅く，スタジオを使わせてもらい，オーディオとビデオのシンセサイザーを使って二本（一本は未完成）制作した。そのうちの一本は「ビデオ・スペース300」展（5月19日-24日，大阪現代美術センター）に出品した。

3月6日-9日に，全SUNYの学生，卒業生，教員によるフィルム・ビデオ・フェスティバルが今年はバッファロー校で開かれた。私も学生，教員と一緒に吹雪の中10人乗り位の大学のバンでバッファローに行った。風も強かった性かとても寒く，昼間で－15℃位であった。会場では連日朝10時から夜中の12時まで作品の上映，ディスカッション，シンポジウムが，いくつかの会場を使って実に活発に行われ，ホテルに帰るのはいつも夜中の1時頃である。特に，二日目の午後の「個人制作の危機（Crisis in Independent Production）」というテーマのシンポジウムでは会場の聴衆もまき込んで，時には感情的な議論も出て，実にエキサイテングなシンポジウムであった。

ビンガムトン滞在中，月に3回程ニューヨーク市に出て，美術館や映画・ビデオの上映，講演会等を精力的に回った。特に，近代美術館の「形態の対照—幾何学的抽象美術1910-1980」，「ニュー・ビデオ：日本」，「ミース・ファン・デル・ローエ100年展」，又グッゲンハイム美術館の「彫刻における変質—アメリカとヨーロッパ美術の40年」，「ナウム・ガボ—構成主義の60年」，さらにミレニアム（Millennium），キッチン（The Kitchen）での映画・ビデオの上映・講演等は大変面白かった。

5月19日にビンガムトンを発ち，シカゴ，サンフランシスコ，ロスアンゼルスを回り，5月31日に予定通り帰国した。初めての海外研修で，要領を得なかったり，失敗したりしたことが多々あったが，又近い将来もう一度ニューヨークへ行きたいという気持をますます強くした五ヶ月であった。